



時代は移っても、二上山は変わらない。自然と調和して生きていかなければならない、私たちにそれを教えているようだ。

二上山の二つの山姿は、万葉世界のかもしだすおほかさと、そこに秘められた悲劇の舞台の荘厳さをあわせもっている。

いつの時代も 原風景だった。

その昔から「ふたかみやま」の名で呼ばれた二上山。大和(奈良県)と河内(大阪府)の国境に位置し、金剛山地の北部にあたります。二上山群の主峰のこの山は、雄岳(五一七メートル)と雌岳(四七四メートル)の二峰からなっているのです。優美な形の二つの山のその姿は、たんなる風景としてではなく、たえず見る人々の心に訴える、そして何かが感じられる山でした。

万葉集に歌われた世界は、この山が一つの山岳という存在を超えて、歌われるに十分な、人々の意識に上るに十分なものをもっていただけではないでしょうか。

大坂を吾が越え来れば

二上にもみじ等流る時雨降りつつ

万葉時代から歌枕として知られ、大和のシンボルともなった二上山、いつ見ても平野の向こうに双曲線を描くようにある山。天に飛び立とうとしている鳥の両翼にも見える山姿。それは巨大な墳墓にたとえられるでしょう。

雄岳の頂上にある大津皇子の墓は、すでにこの山の存在を明示しているように思えます。大津皇子は天武天皇の第三皇子に生まれたけれど、あまりに勇敢で聡明な資質のため、天皇の死後わずか、異母兄弟の草壁皇子一派の策略によって謀反の罪を着せられ、処刑されたといわれています。二十四歳の若さであったといえます。あまりにも悲しい皇子の死に際して、大来皇女は嘆き悲しみ、そして詠じました。

うつそみの人なる吾や明日よりは

二上山を弟背と我が見む

二つ並んだ山の姿はそのまま姉と弟の姿となって、心の中に生きているのです。哀切さあふれる歌は、この山の悲劇的なイメージをいつそう高めて、多くの人々へ訴えかけて来ます。そのたおやかな姿のためでしょうか。どこまでも叙情の中に存在しているのです。そんなことから悲劇の皇子の墓は、この山全体ではなかったかと考える人もいます。こもりとして天へと伸びる頂は、古墳の姿そのものだと思えるというのです。それもこれも、人々が敬虔な気持ちになっただけで二上山の姿に、何かが感じられるからなのでしょう。

姉と弟が寄り添っている姿、そのような光景を二上山の二つの峰になぞらえると、この山がシンボル化したことが理解できるようです。大和盆地から見ると、西方にいつも仲良く並んだ二つの峰があり、それはきつと人々の思いの中に深く沈んでとらえて離さない風景となったことでしょう。たとえばこの地に育った人が、遠く離れて暮らしていても、目を閉じると必ず、あの二上山に夕日が落ちて行く光景が浮かんでいたことでしょう。

のどかな日差しがうらうらとしている春の日、かすみの中に浮かんでいるような二上山は、田圃の稲を見守るように立っていました。真っ白な入道雲が天を飾り、万緑が目まぶしい夏の日、力強く見える二上山。実り豊かな秋には、次第に赤づいていく山裾の木々。そして、二上山への山道にも、舞い落ちた木の葉が積もって、その上を踏み締めて歩いて高みへと上って行く人々の姿が見えます。

四季を通じて二上山は、この地に暮らす人々にたえず優しく語りかけてくれているのです。それはこの山が、みんなの心の故郷だからではないでしょうか。人々の思いが帰る原風景だからではないでしょうか。